

弥生の博物館 青谷上寺地遺跡を訪ねて

鳥取県鳥取市青谷町



青谷上寺地弥生遺跡 2005.7.28.

1. 弥生時代 後期 大陸と大和を結ぶ山陰の鉄
2. 弥生の地下博物館「青谷上寺地遺跡」概要
3. 鉄の時代を告げる「青谷上寺地遺跡」を鳥取県青谷を訪ねる

本年 7月 大阪で古代山陰のシンポジウム 2度ほどあり、邪馬台国・大和王権に至る日本黎明の時代に山陰が果たした役割が論じられた。

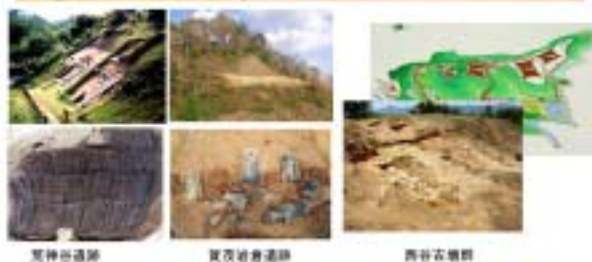
弥生時代中期の終わり頃 出雲荒神谷遺跡で 358 本もの大量の銅剣をはじめ、銅鐸・銅矛が埋められているのがみつき、さらに荒神谷遺跡から距離にして 3キロほどの賀茂岩倉遺跡で 39 個の銅鐸が発見された。いずれも山中に隠すかのように山の斜面に埋められていた。

青銅器の文化の終焉を示す大きな出来事といわれ、これを境として、弥生時代後期 1 世紀～3 世紀頃にかけて、この山陰で青銅器を中心とした文化から鉄の文化へ大きく変化する。

「大量の鉄」を持ち、国のさきがけともみえる大集落 東出雲・伯耆の妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡が出現である。また、山陰地方に四隅突出墳という独特の首長墓が出現する。

「山陰の鉄」が大きく大和王権にかかわっている。

弥生時代の大集落「妻木晩田遺跡」「青谷上寺地遺跡」は国の芽生え 日本に鉄の時代の到来を告げる「鉄の町」そんな印象を受けてまだ見ていない鳥取県倉吉市に近い海岸「青谷」の「青谷上寺地遺跡」を訪ねました。昨年「弥生人の脳みそが出土した」とセンセーショナルに報じられた遺跡で、まだ極一部の発掘であるが、大量の細工・加工が解かされた木製品・土器・獣骨製品・ガラス・石器・鉄器・獣骨・人骨が出土し、その出土の量と出土品の素晴らしさ そしてそれらから浮かび上がる弥生人の生活から「弥生の博物館」と呼ばれる大集落。そして 色濃く大陸・日本海諸国との交流を示す港湾都市でもある。



荒神谷遺跡

賀茂岩倉遺跡

青谷上寺地遺跡

7月28日 朝 神戸を出て 家内と二人 青谷上寺地遺跡の見学に出かけ、帰りは倉吉から中国山地 古代からの産鉄地 奥津・津山へ。

国内で確認された初期製鉄炉の一つ6世紀初頭の「大蔵池南遺跡(岡山県久米南町)」ならびに直ぐ近くの古代物部氏の鉄の足跡誕生川流域のたたら製鉄遺跡群を訪ねて出雲から吉備・播磨から大和の鉄のルートを巡る道。夏の暑い一日でしたが、「古代の鉄の道」の素晴らしい足跡と風景を堪能して帰りました。

この資料には そのうちの青谷上寺地遺跡の探訪記をまとめました。

1. 弥生時代 後期 大陸と大和を結ぶ山陰の鉄

1～3世紀 この時代、鉄を産する朝鮮半島に近い先進地北九州諸国をはじめ日本各地には小国が分立し、「魏志倭人伝」に言う「倭国の大乱」を経て、「邪馬台国 卑弥呼」が成立する過程にあった。一方、朝鮮半島でも後漢・三韓分立の戦乱時代である。

戦乱・諸国分立の中で、多くの渡来人来日など活発な朝鮮半島との交流の時代である。

見方を変えると朝鮮半島から日本に持ち込まれた「鉄」が、道具・武器に加工されて、農耕・大規模な土木工事そして武器に使われ、パワーを増した集団が首長を中心に「国」に発展してゆく。

渡来鍛冶工人の助けをかり、本格的な鍛冶加工が広がって行く。

この弥生後期の日本各地の鉄器出土量を見ると大陸・朝鮮半島に近い鉄の先進地北九州が圧倒的に多く、次に妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡のある鳥取・岡山が多く、畿内は少ない。

畿内はまだ鉄の後進地である。

弥生時代の歴史年表と妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡



妻木晩田遺跡



青谷上寺地遺跡

日本各地の弥生時代後期 鉄器出土数

	刀剣	機	工具	農具	炊器	他	小計	不明	総数	備考
福岡	83	388	602	238	213	61	1603	243	1746	
熊本	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
佐賀	25	47	91	85	69	19	337	28	365	
奈良	3	32	66	13	17	82	203	20	223	
鳥取	26	67	224	54	76	88	515	149	934	上寺遺跡0
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち99点は鳥取
兵庫北群	15	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南群	11	30	22	0	6	30	89	22	111	
京都北群	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南群	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大和	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
(藤田雄司「見えざる鉄器」『究研』Ⅱ2002年9月を一部改変)

「北九州と中国地方・畿内の戦い」西日本で鉄の供給をめぐる争いが「倭国の大乱」でなかったか????」

大和を中心に北九州とは別に鉄の供給ルートを持つ吉備・出雲が連合して九州と対抗し、朝鮮半島の鉄の覇権を握った大和の連合が北九州を押し、日本を統一していったのではないか……

そんな風に取り取れる弥生後期の鉄器出土の分布である。

山陰の妻木晩田遺跡は麓に入り江を有する丘陵地の上に存在する高地性の大集落で、青谷上寺地遺跡も山麓ではないが、三方を小高い丘陵で隔てられ、海岸も小さな山と砂州で隔てられた入り江の奥の丘陵地で、高地性集落とおなじような要害の地。入り江は日本海諸国や朝鮮半島との交流が行われた港湾都市の機能を有していたと考えられる。

「鉄」伝承が多い出雲でありながらたたら製鉄の開始はずっと後の時代であり、「出雲が大和とどんな関係にあったのか???'」不思議でありましたが、朝鮮半島との交流を通じた鍛冶技術の先進地と考え、九州に対抗して大和が吉備・出雲と結ぶルートが見えてくる。

古代の「和鉄の道」日本海沿岸ルートの中央にある山陰が半島の鉄を持って力をつけた。

そんな風に弥生時代後期山陰に現れた妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡を見ると「農耕文化の弥生集落」といった見方が一挙に先進文化に彩られたイタリア ローマのような「都市国家」に見えてくる。



弥生時代後期 大陸や朝鮮半島の文化を取り入れ、急速に発展する西日本で、文化の先進地北九州が

一つの文化・通商のセンターであり、そこから瀬戸内や若狭から琵琶湖さらには四国の南を經由して東へ進んだ東端に河内・大和があり、ここも東のセンターとして、文化・流通の集積地となっていて、ここからさらに東国へ文化が伝播する構造になっていた。

そして、西日本の諸国が大和・河内の勢力と結んで先進技術・文化吸収のサテライト

を置き、それらが急速に力を伸ばし、連合を組んでいったのではないだろうか……

山陰は大和にサテライトを置く一方また大和と同じように大陸・朝鮮半島や九州と西日本さらに北陸・東国との交流中継地として発展していったのだろう。

古代山陰の鉄がそんな日本誕生の大きな役割を演じ、その萌芽は妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡にある。

まあ 妄想かもしれませんが、豪族連合というよりもパワーを持ったそんな先進的な「国」の連合体が「邪馬台国」をつくり、やがて大和王権へと発展していったと見える。

石見・出雲・伯耆そしてその南の吉備・播磨の中国山地は古代の産鉄の地 数々の鉄伝承があり、天日槍・スサノオ・少名彦(吉備津彦)など朝鮮半島渡来の鉄伝承もある。

日本の鉄鍛冶・鉄の本格的実用の時代への黎明の鉄の郷が「妻木晩田遺跡」「青谷上寺地遺跡」ではないか……

「妻木晩田遺跡」を訪れた時には大山の麓 眼前に淀江の入り江と島根半島の広がる海原 そしてその後の古代淀江の郷に大陸との交易文化にイメージを膨らませましたが、勉強不足で具体的な山陰の鉄にまで思いも及びませんでした……



妻木晩田遺跡

青谷上寺地遺跡



妻木晩田遺跡から島根半島弓ヶ浜眺望

参考 古代鉄の大王国 山陰 伯耆国 溝口の鬼伝説と大山山麓の大製鉄遺跡群 & 妻木晩田弥生遺跡
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/jstlaa05.pdf>

「青谷上寺地遺跡」は是非見たい。

予備知識は色々仕入れましたが、本当の所 まだ どんなどころか 想像もつかない。果たして イメージのとおりだろうか・・・

まだ ほんのごく一部しか発掘されていないのに「妻木晩田遺跡」をしのぐ鉄が出土し、しかもその鉄の道具を使った数々の加工の文化「弥生の博物館」と言われる。

また 「無造作に溝に投げ込まれた多数の殺傷痕のある人骨と弥生人の脳が出た」という。

「銅の突き刺さった人骨と殺傷痕」これこそ「倭国の大乱」の証拠」という研究者もいる。

(銅製の武器は脆く人骨で折れて体内に残るが、鉄製は強く引き抜かれるので殺傷痕はついても武器は残らないという)

7月28日 朝 神戸を出て 家内と二人 青谷上寺地遺跡の見学に出かけました。

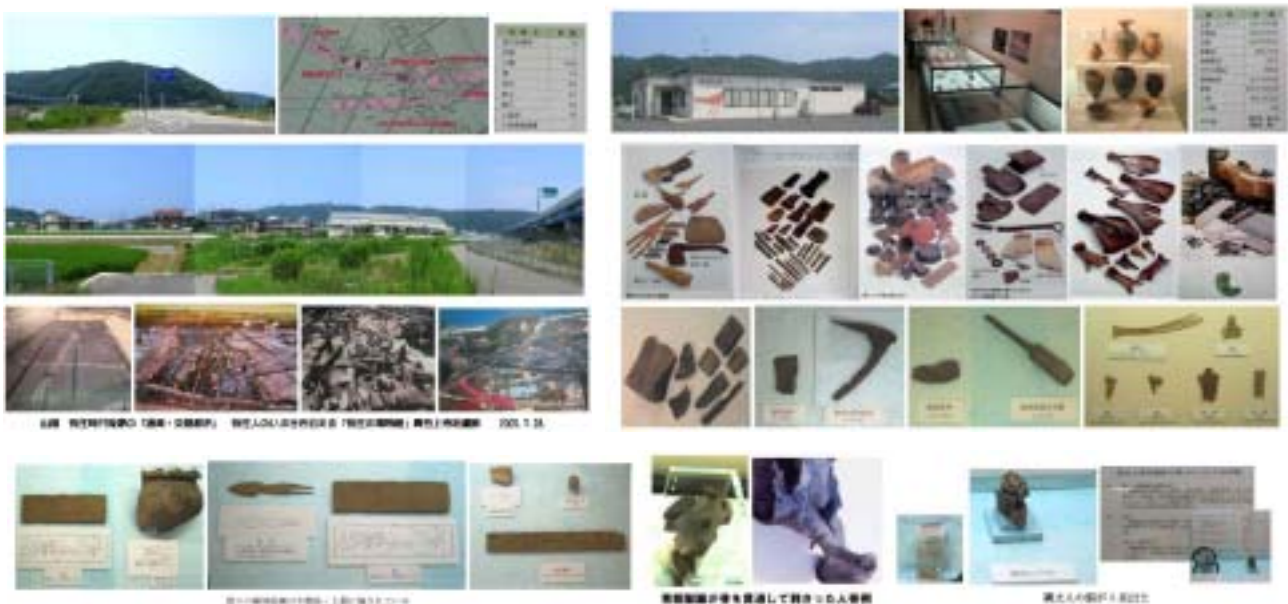
青谷上寺地遺跡から帰りは倉吉から中国山地 古代からの産鉄地 奥津・津山へ

国内で確認された初期製錬炉の一つ6世紀初頭の「大蔵池南遺跡(岡山県久米南町)」ならびに直ぐ近くの古代物部氏の鉄の足跡誕生川流域のたたら製鉄遺跡群を訪ねて出雲から吉備・播磨から大和の鉄のルートを巡る道。夏の暑い一日でしたが、鉄の道の素晴らしい足跡と風景を堪能して帰りました。

この資料には そのうちの「青谷上寺地遺跡の探訪記」をまとめました。

2. 弥生の地下博物館 青谷上寺地遺跡 概要

上寺地遺跡展示館展示・「青谷上寺地遺跡発掘ノート」「埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査報告」より



「弥生の博物館」鉄製品・木製品ほか青谷上寺地遺跡出土品の数々 上寺地遺跡展示館で 2005.7.28.

青谷上寺地遺跡は今から 2200 年前から 1700 年前の弥生時代中期から後期にかけての遺跡で、国道 9 号線のバイパス工事に先立つ発掘調査で、数々の弥生人の生活道具がみつき、その質量ともに豊富なこと保存状態がよいことから「地下の弥生博物館」とよばれる。

この遺跡のある青谷は海岸近くのごく小さな沖積平野で、縄文時代入り江であった場所が砂州の発達で日本海と遮断され、潟湖へと変貌し、その西岸のほとりに遺跡が成立した。

潟湖という天然の良港に恵まれ、漁労が盛んな一方、遺跡の南西側の低湿地部には遺跡成立の当初から、水田域がり、農業も主要な生業であった。

この二つの領域に挟まれた遺跡中心部では当初から土坑や焼土域があり、そこから東の湖に向かって貝塚が築かれ、次第に湖が埋められて行く。

そして、弥生時代の中期になると中心部に引き続き土坑や土焼域が形成されるが、その周辺部に大型の溝が築かれ、多数の木造構造物が作られるようになり、後期になると中心部を取り囲む東西の両縁には内外を区別するように築かれており、東の溝の一部では 5300 点以上 1 約 00 人分の人骨が出土。

これらの中には脳を内部に残す頭蓋骨 3 点や殺傷痕のある人骨 110 点(個体数約 10 人分)があった。

また、溝には内側の岸辺に沿って列状に杉板矢板が打ち込まれていた。

鉄製の斧やのみなど鉄製道具の普及がこれらの土木工事を支えたと考えられる。

また、遺跡中心部の東辺では砂地の上に細長い板を立て並べ、倒れないように杭で固定した謎の遺構が無数に見付かった。



中心部の東西の縁にある内外を区画する溝と板列遺構



東辺の砂地上から出土した多数の謎の板列遺構

遺構名	数量
掘立柱建物	6
円塚	1
土塚	435
溝	74
杭列	93
焼土	97
集石	18
土器層	16
卜骨集積遺構	1

遺物	数量
土器(コンテナ)	約2,400点
木製品	約9,000点
石器	約4,000点
鉄製品	約270点
青銅製品	36点
ガラス製品	85点
骨角製品	約1,400点
獣骨	約27,000点
人骨	約5,500点
人の脳	3点
その他	銅器、磁器、石



鉄製品



木工製品

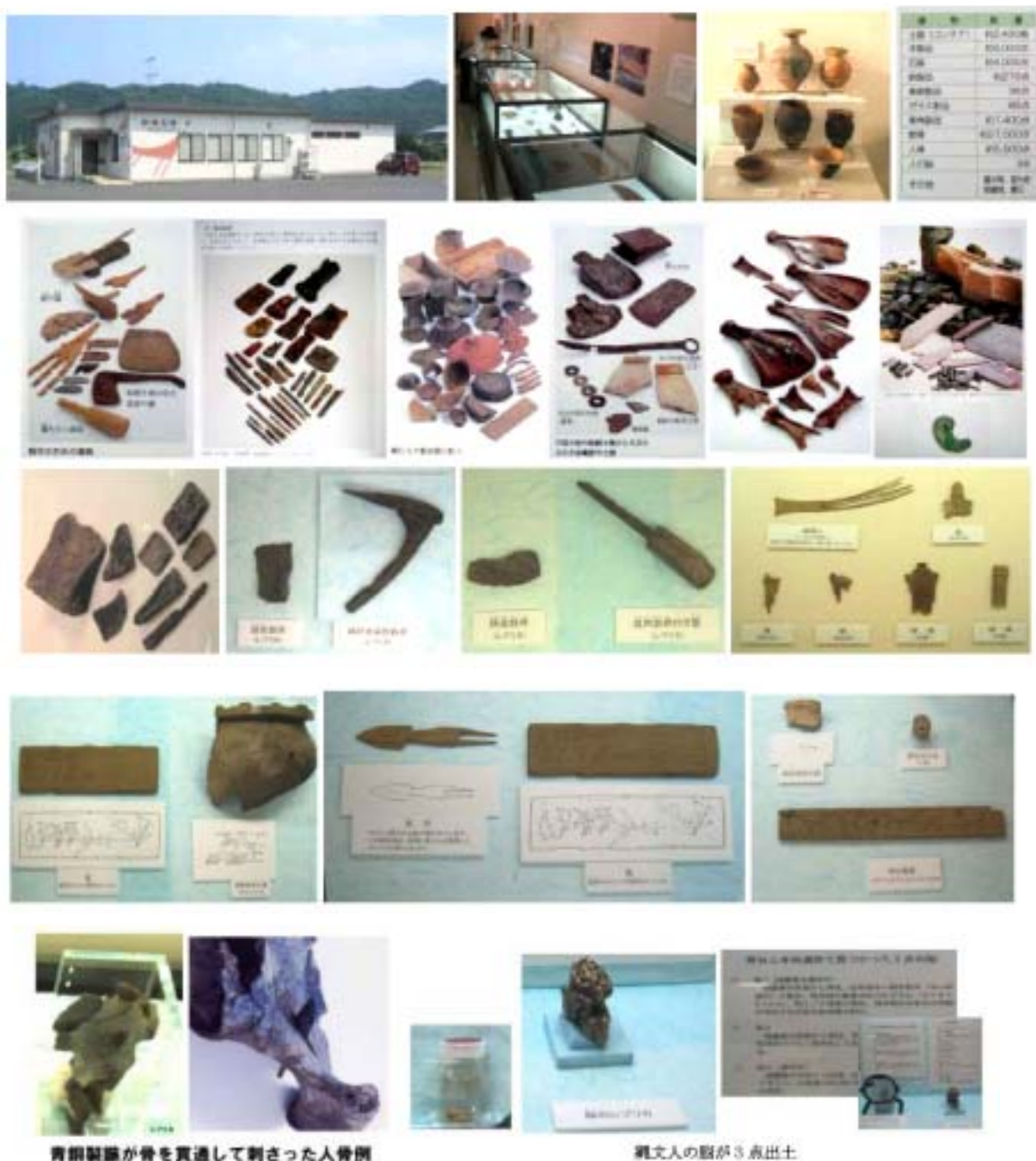
青谷上寺地遺跡の遺構・出土品概要

また、これら遺跡縁辺部の溝からは遺跡中心部にも勝る大量の遺物が出土しており、祭祀の場を含む溝の周辺部(中期までは東側潟湖方面 後期には周辺を囲む溝とその外側)が廃棄の場所となっていたと考えられる。一方 この遺跡では全時代を通じて、まだ竪穴住居跡は確認されておらず、遺跡の中心部の正確は良くわかっていない。しかし、この中心部では未製品や素材・加工具が集中的に出土する工房域と推定されるエリアがあり、木製品・骨角器・鉄器・玉類等の生産・加工をおこなっていたと想定される。

また、土器や木製品遺物の表面にサメやシカさらに謎の小動物そして海原に行く船団などの素晴らしい線刻画が描かれたものもある。

あわせて、大陸・朝鮮半島から入手したと考えられる鑄造鉄斧などを再加工して、板状斧・のみ・やりがんな・刀子・楔・穿孔具などの道具がつくられ、これら鉄器の出土数は 300 点を越え、鉄の先進地北九州をのぞくとずば抜けて多い。これらの優秀な工具が素晴らしい木製品・骨角器などの高度な加工技術を支えていた。鉄器の未製品や裁断痕のある鉄器が出土していたことから、簡単な鍛冶加工がここで始まっていたこともうかがえるが、詳細は判らない。

青谷上寺地遺跡の出土品の数々 上寺地遺跡展示館展示より 2005.7.28.



青銅製鏃が骨を貫通して刺さった人骨例

縄文人の脳が3点出土

また、発掘面積も遺跡全体の極わずかであり、居住跡も見付かっていないので遺跡全体を論ずることは難しいが、高度な技術を持つ集団がこの青谷に居て、日本各地のみならず、半島諸国とも交流をしていたと考えられる。

逆の視点からいうと天然の良港であるこの青谷の地が日本海沿岸・朝鮮半島諸国との交流を可能として、そこから数多くの渡来人・鉄の技術等先進技術を取り込み、交流拠点としての港湾都市を展開していたとも想定される。これらの見方を裏付ける高度な技術を有する加工製品・鉄器などの道具類のみならず、古代中国の通貨「貨泉」や朝鮮半島系無文土器・ト骨占遺構そして地域間交流を示す土器・水晶・翡翠・など海外や国内各地との関わりを示す遺物が数々出土している。

これら交易の中心に「鉄」があったに違いない。

参考 「青谷上寺地遺跡発掘ノート」

「埋蔵文化財センター上寺地遺跡 調査報告」

www.adg.ne.jp/auto/www.pref.tottori.jp/maibun/houkokusho.htm

3. 鉄の時代を告げる「青谷上寺地遺跡」を鳥取県青谷に訪ねる 2005.7.28.

青谷は鳥取県の東部 現鳥取市を中心とした古代因幡国の西端にあり、その西は米子大山の聳える伯耆国。鳥取へは西播磨の山間を抜けてゆく智頭線が開通して山陽・智頭線経由で2時間ちょっとなのですが、高速道路がなく、関西からは一番行きにくい場所になりました。

7月28日 朝 神戸をでて、久しぶりに国道29号線を揖保川沿いに北播磨播磨風土記の産鉄の地の山間を戸倉峠を越えて鳥取に出る。神戸から約2時間ほど。

鳥取から海岸沿いの国道を西へ白兔海岸を通過して30分程、海に突き出た岬の根元を乗り越すとパッと西の岬(海岸にこんもりある丘)まで約1Kmほど白砂の浜が道路に沿って見える。青谷の海岸で浜は歩くとキュッキュッと鳴く「鳴き砂」の浜。

東西の岬の間には真っ青な日本海が広がっている。狭い砂浜の湾であるが、道路の反対側には青谷の町並みが広がっている。



岬を乗り越えたところに広がる青谷の海岸



西端を流れる勝部川の橋より鳴き砂の青谷海岸と青谷の町並み 2005.7.28.

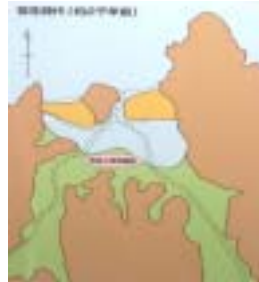
弥生時代にはこの浜が砂州になっていて、西の丘の麓を流れる今の勝部川の河口を出口として奥へ湖が広がっていたという。現在の市街地がすっぽり湖でまさに天然の良港である。この湖の奥 西側から中央部の岸辺に青谷上寺地の集落があったという。

西の岬の所まで行ってユーターンして、青谷上寺地遺跡・展示館と山陰線青谷駅への標識の所から、国道を

南に折れて 町中に入り、日置川の橋を渡ると川に沿って未整備の広場があり、そこに上寺地遺跡展示館が建っていた。広場の南側を山陰線が走り、青谷駅が見え、そのさらに南側が上寺地遺跡である。また 北の海側は東西端の山裾が迫っていて、この展示場のある場所は弥生時代の湖の真ん中あたりか??そして、西側の丘の裾を流れる勝部川の河口が日本海への出口 南側が上寺地の集落である。



青谷上寺地遺跡概略図



弥生時代の青谷



青谷上寺地遺跡展示館



青谷上寺地遺跡展示館



展示館の南 山陰線の向こうが上寺地遺跡

展示館には上寺地遺跡の発掘の様子や出土遺構・出土遺物などが良く整理してパネルで展示されていた。やっぱり、木製品の緻密な細工と道具の豊富さに驚かされる。

鉄無しにはやっぱり出来なかったろう。水田跡や数々の工房跡と思われる場所 遺跡の周囲の溝と祭祀跡などが見ついているが、居住区はまだ見つからず、この集落の正確はまだ良くわからない。

しかし、多彩な遺物から単なる弥生の集落ではなく、弥生後期 日本海沿岸交流の拠点港湾都市であったことがうかがえる。



鉄鍛冶工房がこの遺跡の中にあり、数々の農耕・漁労などの道具製作や木製品などの加工を支えたというが、学芸員の人に会えず、どの程度の鍛冶が行われていたかは不明である。

でも 木製品や土器・骨角器の洗練された精密加工や表面に施された線刻画を見るとその高度な技に驚嘆させられ、また、鉄器というと直ぐに武器・武具ということになるが、「弥生の地下博物館」と呼ばれる上寺地遺跡の多様な文化や豊穡の世界を支えた鉄の道具類に改めて鉄の重要性を見る。

また、ここに居た人たちの脳みそが銅製鏃の刺さった人骨と共に展示され、国の萌芽・倭国の大乱の痕跡と

も見られるという。

ほんとうにどんな人たちがここに居たのだろう。

物だけでなく、日本海沿岸諸国や朝鮮半島の人たちも多く居て、湖岸は活気に満ちていたに違いない。

渡来の人達と在来の人達の同化プロセスの謎を解き明かしてくれるかもしれない。

はやく、居住区が見つかり、この遺跡全体像が浮かび上がってくるのが、待ち遠しい。

「『国・都市の萌芽』原始的な生活というより、弥生の先端都市というのがふさわしい現代に通じる匠の世界が開示されている」と益々想像を膨らませています。



上寺地遺跡で見つかった弥生人の脳(レプリカ)

展示館をでて、市街地をはなれ、山陰線を渡って約 500 メートルほど南側に行った田園の中を東西の丘陵地を結んで新しい高架道路とバイパス道路が通っている。

この両道路の下が発掘された上寺地遺跡である。



上寺地遺跡の中央部周辺(青谷中学横)より、東側を見る 【北 南】 2005.7.28.



上寺地遺跡の中央部周辺(青谷中学横)より、西側を見る 【南 北】



東の端 日置川の所から西側 上寺地遺跡方面を見る 【南 北】 2005.7.28.

青谷上寺地遺跡 全景 【青谷羽合道路地下】2005.7.28.

青谷の町の南側の丘陵地の山裾を東西に貫く高架道路とバイパス道路。その北側には田園が広がり、その向こうに市街地。この田園の中がすっぽり潟湖で、この東西のバイパス道路の丁度真ん中あたりから西側に上寺地遺跡が広がっている。この道路建設部が発掘されただけでほかの部分はまだ手づかずである。ほんの道路部だけであれだけ沢山の遺構遺物が発掘されており、まだ 何が出てくるかわからない。丁度バイパスが高架道路と分かれて北へ曲がるあたりが遺跡の中心部。



上寺地遺跡の西端 勝部川の土手より 2005.7.28.

ここに立って弥生をイメージすると、周り三方がコの字に丘陵地が取り囲み、前方には丘陵地に囲まれた潟湖。そして湖の西端で海につながる丘陵地で隔絶された狭い空間である。この縄文後期の時代 妻木晩田遺跡のように高地性の弥生集落が出現するが、この地も海岸ではあるが、環境的にはそれに近いと見える。

西に出雲。そして 妻木晩田の大集落遺跡があり、次の古墳時代には、文化の先進地 九州北部・朝鮮半島と河内・大和の丁度中間にあって、日本誕生に大きな役割を演じ、そのありさまが数々の神話・伝承として残っている。

そんな「弥生から古墳時代への移行。そして鉄の時代の到来」を考える素晴らしい遺跡である。鉄の時代の到来。弥生から古墳時代へ。山陰の鉄が果たした役割、具体的に弥生の中で鉄が活き活きと生活文化を支えていたことが実感できる遺跡。それが上寺地遺跡でした。この鉄のエネルギーが日本誕生へ向かわせたのだろう。

また、この山陰で渡来人の果たした役割も忘れてはならない。大陸・朝鮮半島から続く道でもある。そんなことを思い出させてくれるごとく、直ぐ西の東郷湖湖畔には中国テーマパーク燕趙園がありました。古代この山陰の出雲から吉備・播磨から大和へ。鉄の国の連合が大和王権を誕生させた鉄の道。そんなイメージを描きながら、倉吉から奥津・津山へと中国山地を越えて、日本でも最も初期の製鉄遺跡のひとつ 吉備国久米南町大歳池南製鉄遺跡を訪ねて帰りました。

2005.7.28. Mutsu Nakanishi



吉備の古代遺跡を訪ねて



中国テーマパーク燕趙園



鳴き砂の青谷海岸